千の風になっている母　　H．N

最愛の母は食道癌の宣告を受け約2年間の壮絶な闘病生活を送り天国へ旅立ちました。高齢で体力的にも弱かった為手術や化学療法は受けられず放射線治療だけを受ける事になり二人一緒の入院生活が始まりました。治療が終わって間もない頃、放射線性肺炎を患い死の淵を彷徨う事になりましたが、奇跡的に生き返り周りを驚かせました。ただ自力では歩けず、必死にリハビリに励み一時退院が出来る様になりました。食道癌は人間の“食べる”と言う生きる楽しみを奪うとても辛い病気です。母が自分の口で食べられる間に少しでも美味しい物を味わってもらおうと色んな所へ連れ出しました。でも食べ物が途中でつっかえ注文した物が台無しになったり、飲み込んだ物がつっかえ救急車のお世話にと、この病気になってからは胃カメラが生きる為の唯一の手段となりました。食道の狭窄が進み、飲み込んだ物を全て戻してしまいました。胃カメラで通り道を作っても急場しのぎで、再び塞がってしまいました。

母は唄を歌う事とピアノを弾くのが大好きでした。本来の声よりも段々かすれ声になって来ましたが、母は食べる事よりも歌を唄うのが楽だよと明るく振る舞いました。胸の中ではどんなに辛かったでしょう。鎮痛剤の使用時間が段々短くなる中でも精神力で発表会の舞台に立ちました。段々弱くなる視力の為、楽譜をどんどん大きく拡大しながらもピアノを弾いていました。又精神を集中させながら般若心経の書道にも励んでいました。自宅での生活は束の間、飲み物さえも通らなくなり、再び入退院を繰り返す事になりました。姑息的な処置では間に合わなくなって、胃に穴を空け食べ物や薬を供給する胃瘻(ストーマ)を造設する事になりました。生きる為に選択した最後の手段でありましたが、人間の「尊厳」が問われるとても辛く難しい問題です。意識がはっきりしない場合は確実に栄養を供給出来る素晴らしい手段ですが、意識が正常な状態で胃瘻をつけての生活は人間として本当に過酷な事です。食べ物の臭いを嗅ぎ無性に食べたいと感じても決して口にする事が出来ない、傍で支える自分も胸が裂かれる思いと同時に目の前では決して食べ物を口にする事は出来ませんでした。それまで留学先から往き来してた息子が見かねて、私に相談もなく学業を中断して帰国し手伝いをしてくれました。

母の病気の宣告から約1年半が経過した頃、私は乳房の6か月検診を受ける事になりました(以前良性腫瘍で2回手術を受けました)。診察の結果は悪性で数日後手術をと言われました。自分が癌と言う意識は微塵もありませんでした。母を看る人がいないので入院は絶対出来ないと先生に喚いたのです。手術を受けるなら日帰りでお願いしますと。先生方が皆言葉を失い唖然としておられましたが、私

は切実でした。帰宅する車の中で泣きながら、電話で母を看て貰える看護師の友人の手配をしました(胃瘻の世話は医療行為で家族か看護師しか行えません)。母には笑顔で良性だけど早急に手術した方が良いと言われたので入院せねばならないと話しました。私の病名を知ると自責の念に陥る母が堪らなく可哀そうだったので最後まで隠し通そうと思いました。入院と言う二文字を発しただけでも母は口には出しませんでしたが凄く動揺していました。24時間いつも一緒だったのに数日離れていなければならないなんて。手術前日母と約束をしました。私が戻るまで絶対倒れる事無く頑張っていると。予定通り手術を受け帰宅しましたが、母のちょっと浮かない顔に何とも言えない不安を感じました。それから数時間後悪い予感が的中し、激しい肩痛と共に酸素濃度がどんどん下がり、救急車でICUへ直行でした。両肺に胸水が溜り真っ白でした。とても辛かった筈なのに私が戻るまで約束を守ろうと必死に耐えてたのです。即気管挿入となり生死の境を彷徨いました。胃瘻に続き凄惨な状況でした。意識がはっきりしているのに気管挿入、抜管、再挿管、再抜管までの数週間は地獄でした。母は想像を絶する忍耐力と生命力で再び生き返りまたもや皆を驚かせました。この間私も手術痕が化膿し一か月以上血膿を絞り出す毎日でした。母が一般病棟へ移り再び24時間一緒に過ごす事になると同時に私は院内で30回の放射線治療を受ける事になりました。母には内緒で売店に買物をと言いながら通いました。放射線が終わると通院化学療法が始まるので、あと数日の所で母に告白せねばならなくなりました。母は言葉を失っていましたが、大丈夫だよと私を励まし、医療用麻薬の副作用のなか、翌日から車椅子に乗り私の治療に付き添ってくれたのです。母の痛みが段々増し経腸栄養剤と薬の注入回数が1日十数回に渡り、私は睡眠も取れない中で化学療法を受け始めました。母が亡くなるまでの間、治療の副作用を感じる余裕等ありませんでした母が生きてる間は母に専念し自分の事はその次だと思っていました。

最愛の母が亡くなり、私は生きる気力も意欲もなくなり、涙が溢れ、体も意のまま動かず、母のあとを追いたいと思うばかりでした。愛する息子がいたから生き抜けたと思います。母が苦しむたび泣いてた私に母は、泣かないで強く生きてねと言いました。涙が出そうになったらこの言葉を思い起こし自分を奮い立たせております。自分の病気とちゃんと向き合い始めたのも時が大分経ってからです。

母死後まもなく私は、健やかに生きる権利、安らかに死ぬ権利を自分自身で守る為に、日本尊厳死協会に入会しました。不治の病で死期が迫った場合の延命措置をどうするか等、自分の確実な意思を表明しておく事で、医療関係者や残された家族に究極の決断を委ねなくても良いのです。

母は生前から言ってた様に「千の風」になっていつも私と息子の傍にいます。いつも母の温もりを感じ、些細な事にも感謝しながらこの世を過ごし、必ず母の元へ行き、引続き世話をさせてもらいたいと切に思っております。